様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 1 月 7 日現在

機関番号：３２６４９
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2008～2011
課題番号：20520077
研究課題名（和文）　西欧各国および東アジアにおける受容から見たニーチェ —耽美主義とナショナリズム

研究課題名（英文）　Nietzsche revisited from his receptions in European and northeastern Asian countries-Narcissism and Nationalism

研究代表者
三島　憲一（MISHIMA KENICHI）
東京経済大学・経済学部・教授
研究者番号：70009554

研究成果の概要（和文）：多系的近代化、選択的近代化、交錯的近代化の観点から、西欧各国および東アジアにおけるきわめて多様なニーチェ受容を再整理した。多様な受容は特にファシズムの過去を持つか持たないかに大きな分かれ目があることで区別されることが明らかになった。また、ファシズムの過去を持つ国々においては、ナルシシズムが美的ナショナリズムと結合する触媒にニーチェがなったことがあきらかになった。

研究成果の概要（英文）：On the backdrop of the discussions about multiple, selective and entangled modernities I succeeded in analyzing and categorizing diverse patters of the receptions of Nietzsche, especialy sketching their differences in the countries with historical experiences of fascism and the countries which don't have such experiences. In the countries with the history of fascism I could confirm Nietzsche' role of catalyzer for the fusion of esthetic narcissism and nationalism.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００８年度	900,000	270,000	1,170,000
２００９年度	800,000	240,000	1,040,000
２０１０年度	800,000	240,000	1,040,000
２０１１年度	600,000	180,000	780,000
年度			
総　計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：哲学
科研費の分科・細目：思想史
キーワード：近代化、モダニティ、ニーチェ、ナルシシズム、ナショナリズム、多系的近代化

１．研究開始当初の背景

2000 年代にはいって注目されてきた多系的近代化論を背景に思想史を見直す気運が萌してはいたが、ニーチェを媒介に、ヨーロッパのみならず日本やアジア諸国を対象にする再検討の試みはまったくなかった。

ニーチェ研究は特に日本ではハイデガーの影響の強いドイツ哲学の枠でなされることが多く、そもそも近代化論との接点はゼロに等しかった。ヴェーバーやフランクフルト学

派の近代論を受けた議論にとってそもそもニーチェは、存在していなかった。また、受容の研究は副次的なことと見なされていた。あたかも「本当のニーチェ」がドイツに存在するかのようであった。だが、実際にはニーチェの受容は多岐多様にわたり、ほとんど相反する理解がそれぞれのコンテクストでなされてきた。実はこうした多様性こそがニーチェの「本質」と言えることがようやく認められ始めていた。
同時に近代化を多系的近代化ととらえる見方も２０００年以降欧米を中心に広まったが、日本では今なお十分な理論的定着を見ていない。多系的近代化とはまた、近代のポテンシャルの選択的近代化が各所でなされたことを意味する。そしてさまざまな近代化の道が複雑に交錯することをも意味する。そうした多系的・選択的・交錯的近代という観点からニーチェの多様な受容を見る必要性が認識されてきた。

２．研究の目的
(1)ドイツでの受容を背景にともすると「保守反動」の烙印を押されがちなニーチェが、他のヨーロッパ諸国やアメリカ、さらには日本植民地下の朝鮮半島や戦前・戦後の中国ではまったく違った受容をされてきたことを背景に、多系的近代化の議論を肉付けするとともに、フランス、イタリア、アメリカなどではデモクラシーにおける多様性の議論と結びついたことを示すこと。

(2)日本、ドイツ、イタリアのようなファシズムを経験した国々では、その前後に、美的ナルシシズムとナショナリズムの爆発的融合にニーチェが触媒機能を果たしたことを示すこと。

３．研究の方法
重要な知識人や知的サークルにおけるニーチェの読まれ方、解釈、その政治的機能を種々の文献を手がかりに分析する。その際の方法は多系的近代化に関する社会理論、思想のダイナミズムに関する思想史の理論、受容美学の理論、交錯的近代化に関する文化史の理論などを援用する。

４．研究成果
(1)ドイツにおける初期のニーチェ受容は、その後のハイデガーやナチスによって作られたイメージとはまったく異なったもので、同時代における他のヨーロッパ諸国における受容と大差なかった。つまり、世紀末とユーゲントシュティールの枠組みにおいてニーチェは読まれ、文学のみならず、青年運動や新しいインテリア造形などに多大の影響を与えた。その痕跡は初期のヴァルター・ベンヤミンにも見られる。Th・マンやヴァン・デ・ヴェルデの名前が示すように、世紀末のデカダンスにおける文化的反抗運動の一環であった。

(2)ドイツ以外のヨーロッパ諸国およびアメリカにおけるニーチェ受容はより自由かつ奔放であった。イギリスではバーナード・ショウが、『人と超人』で、ニーチェのモチーフを借りて、世紀末の奔放な男女関係と固陋な市民社会をテーマ化した。アメリカ出身のイサドラ・ダンカンは、官能性とデモクラシーを結びつけたホイットマンの向こうを張って、新しい踊りとディオニュソスを、ニーチェにインスピレーションを受けて結合させた。フランスではジッドが『地の糧』などで、ニーチェのテクストから発する同性愛的な生命賛美を自分の私生活と結びつけて歌い上げた。どれも市民社会の「健全な」道徳へのニーチェの批判を継承している。

(3)ニーチェはまた多くの政治的抵抗の支えともなった。明治末期に日本に留学していた朝鮮半島出身者たちが東京でハングル字で出していた雑誌『知の光 Lumen Scientiae』には、李光洙や田榮澤などその後朝鮮独立運動などで有名になった留学生たちの多くが、強い自我を主張する契機にニーチェが大きな影響を与えていたことを偲ばせる文章がいくつかある。仙台留学中の魯迅に与えたニーチェの影響も見逃せない。また第一次大戦後の北京に発した半日・反帝国主義運動である五・四運動においても、郭沫若の例が示すように、ゲーテの『ヴェルテル』と並んでニーチェの『ツァラトゥストラ』が広く読まれた。事実上ナチスが支配していた戦争末期のイタリアの抵抗運動の若者たちが地下室で読んだのがニーチェであり、その読者の中から戦後のニーチェ全集の編集者のモンティナリが出てきた。また抑圧の強い現在の中国においてノーベル平和賞を受賞した劉暁並が、かなり以前にノルウェーの大学で客員教授をしたときのテーマもニーチェであった。不当な権力への抵抗のインスピレーションを与えたニーチェは、戦後の西ドイツではまったくといっていいほど認められていない。

(4)イタリアのダヌンツィオと、彼の影響を色濃く受けた三島由紀夫は、ともにニーチェから受け継いだ耽美主義を世紀末の芸術的モダニズムへと変容させた。この耽美主義は美的なナルシシズムと結合した極度の個人主義でもあった。ところが両者にあってはこうしたロマン主義的系譜につながる美的ナルシシズムが、国粋主義へと過激化するというアイロニーを見せている。ファシズム以前と以後という相違はあるものの、ともに後発

国のファシズムの相で見る必要があろう。

(5)同じく後発国のドイツでは第一次大戦後は、ニーチェの哲学的受容が進行した。ヤスパースのニーチェ論は、実存主義的傾向に焦点を合わせているのに対して、レーヴィットのニーチェ論は、近代の歴史哲学的思考から自然的世界の循環へと脱出する、脱歴史主義者としてのニーチェを前面に出している。ニーチェのテクストの極端なまでの哲学化を成し遂げたハイデガーは、ニーチェの「力への意志」の思想を存在の歴史の一段階としてとらえる。存在の運命としての近代的主体性の枠組みの中にありながら、それを越えて存在を思考しようとしたのが「永遠回帰」ということになる。いずれにしてもニーチェは、形而上学を越えようとしながら、形而上学の枠をその崩壊の直前に至るまで先鋭化した哲学者ということになる。こうしたハイデガーの思考をその技術論とともにナチスへの加担と見るか、反抗と見るかは意見が分かれるが、ハイデガーがナチスにあきたりず、真正の民族と存在の結合を夢見たこと、その方向でニーチェを読もうとした、いわゆる権威主義的理解に埋没していたことは疑いない。

(6)ファシズムの記憶とハイデガー的哲学化の影にあったドイツや日本と違って、戦後のフランスやアメリカではより自由なニーチェの読まれ方がなされた。フランスではフーコーが、規律や訓練、自己統制を中心に組織化された近代社会に対する批判としての系譜学的思考の起源をニーチェに見る仕事を６０年代以降発表し続けた。デリダも、差異とずらしに生きるテクストをニーチェにおいて重視した。また、アメリカではローティが、ロマン主義的系列のなかでの個人的人生の文学的完成という意味で、デモクラシーの一つの伝統をニーチェに見るという型破りの議論を２０世紀の最後にしはじめた。

(7)日本では明治半ばに高山樗牛がニーチェを大きく取り上げる。樗牛の友人で旧制高校の教授をしていた登張竹風が『ツァラトゥストラ』を訳すが、坪内逍遥による不道徳攻撃もあって、旧制高校の教授を辞さなければならなくなった。ニーチェが反抗的で危険な存在であることを明治国家が見抜いた証拠でもある。同じ鴎外も明治３０年代後半からニーチェに注目し、さまざまな箇所で彼の名前を出している。特に戯曲『仮面』は、仮面をかぶって本来の自分を隠して生きる明治知識人の運命を、主人公の自らも結核を病む医者を材料に、ニーチェの仮面論に仮託したものである。その後も夏目漱石による『ツァラトゥストラ』読解も重要であり、萩原朔太郎のニーチェ受容も見逃すことはできない。戦後では、三島由紀夫が同じく「仮面」を用いながら同性愛の問題を作品化している。しかし、三島由紀夫や西尾幹二のように、ニーチェを出発点とした文学者、文学研究者が極度の国家主義、天皇崇拝に立ち至った例は、我が国独特の現象である。イタリアのダヌンツィオも国粋主義を実行したが、西洋との対決というモチーフは当然のことながら欠如している。

(8)最も不毛な受容は、西谷啓治などのいわゆる京都学派におけるニヒリズム論の枠組みでのニーチェ受容である。彼らの議論の骨子は、西欧は近代がいきづまる中で、ようやく無の意識に到達したが、無についての思考は東アジアで、特に日本で、さらには日本の禅宗の修行のなかで培われてきた。今や日本が中心になって近代の克服をはかるべきである。その証拠に西欧由来の経済や科学技術でも日本はトップに立ってきた、とするものである。こうした議論は西欧へのコンプレックスの逆転としての日本文化の自己主張にすぎなかった。こうした議論は、特殊日本的である。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計５件）

① Kenichi Mishima, Die Entmachtung der japanischen Öffentlichkeit. In. Veränderte Sicht auf Risiken, Osnabrücker Jahrbuch, Frieden und Wissenschaft 18, Osnabrück, herausgegeben vom Oberbürgermeister der Stadt Osnabrück und dem Präsidenten der Universität Osnabrück. 2011, S. 139-144.(査読あり)

②三島憲一「世界はニーチェをどう読んできたのか」『ニーチェ入門』河出書房新社,２０１０年（査読なし）

③ Kenichi Mishima, Die japanische Nachkriegsaufklärung und die Rolle von Jürgen Habermas, Zeitschrift für deutsche und internationale Politik, S. 75~88. Berlin, 2009（査読あり

④三島憲一「ニヒリズムは無意味だからやめよう」『大航海』２００９年７月１３７ー１４９ページ（査読なし）

⑤Kenichi Mishima, Some Reflections on Multipe, Selective and Entangled Modernities and the Importance of Endogenous Theories. 『東京経済大学学会誌（経済学)、第２５９号、pp. 235~146. ２００８年（査読なし）

〔学会発表〕（計６件）
①三島憲一、Öffentliche Diskussionen in Japan zu den Ereignissen im Jahr 1989. Symposium zu Ehren von Prof. Wolfgang Seifert anläßlich seiner Emertierung （２０１１年２月２０日ハイデルベルク大学日本学科主催ヴォルフガング・ザイフェルト教授退官記念国際シンポジウム基調講演、ハイデルベルク大学大講堂）
② 三 島 憲 一 、 Between Postmodern sensibilities and ethnocentric naiveté. The Japanese Discussions of the Events of 1989. Symposium at the Faulty for Human Sciences of the University Osaka. 2011. （２０１１年３月１１日大阪大学人間科学研究科比較文明学教室主催国際シンポジウム「１９８９年と知識人」、大阪大学人間科学部３０４教室）
③三島憲一、和辻哲郎の象徴天皇論、２０１０年１０月３１日、社会思想史学会パネル「戦後思想史再検討」（神奈川大学）
④三島憲一、Regression of fin de siècle aesthetics to the radical nationalism – Some remarks to the theme Mishima Yukio and Nietzsche, Symposium for the 40tth anniversary of the death of Mishima Yukio. （２０１０年３月１５日ベルリン自由大学日本学科主催、三島由紀夫死後４０年記念シンポジウム、ベルリン自由大学ヘンリー・フォード会館）
⑤三島憲一、Der Traditionsbegriff in der Kritischen Theorie und Ostasien. Symposium on the Critical Theory in China, （２００８年８月２０日、フランクフルト大学付属社会研究所主催シンポジウム「中国における批判理論」、フランクフルト大学本館大教室）
⑥ 三 島 憲 一 、 Vielfalt der Moderne. Frankfurter Insitut für Sozialforschung, （２００８年６月２０日、フランクフルト大学付属社会研究所会議室）

〔図書〕（計７件）
①三島憲一『ニーチェ以後』（岩波書店） ２０１１年、２４９ページ
②Kenichi Mishima, Mishima Yukio und Nietzsche – Fin de siècle-Ästhetik und radikaler Nationalismus. In: Irmela Hijiya-Kirschnereit, Gerhard Bierwirth(Hg.) Yukio Mishima, Poesie, Performanz und Politik, München (Iudicium Verlag) 2010, S. 32-49.
③三島憲一 「三島由紀夫とニーチェ」『三島由紀夫の知的ルーツと国際的インパクト』昭和堂２０１０年、２７７〜３０５ページ
④三島憲一『ヴァルター・ベンヤミン ―― 破壊・収集・記憶』（講談社現代文庫） ２０１０年、５３７ページ
⑤三島憲一「西欧近代のトポスとしての歴史哲学−普遍主義と個別主義の抗争」岩波講座『哲学』１１巻２００９年 １９〜４８ページ
⑥Kenichi Mishima, Der Traditionsbegriff im Lichte der Kritischen Theorie und der ostasiatischen Erfahrungen. In: Amelung, Dippner(hg.) Kritische Verhältnisse, Frankfurt, 2009, S. 99-118.
⑦三島憲一「ハルツ、アテネ、オライビ」（岩波文庫『蛇儀礼』２００８年、１２３〜１４５ページ。

６．研究組織
(1)研究代表者
三島 憲一 （MISHIMA KENICHI）
東京経済大学・経済学部・教授
研究者番号：70009554

(2)研究分担者
（ ）

研究者番号：

(3)連携研究者
（ ）

研究者番号：